

研究ノート

「論文の読み方・書き方」覚え書

高 松 正 毅

A Note on “Academic Reading & Writing”

Masaki TAKAMATSU

平成16年度より、第二外国語科目と併置する形で「論文の読み方・書き方」という授業科目を新設した。始まったばかりの現時点ではあるが、気づいた点を本稿に書き記す。本稿では特に、学生を取り巻く状況や背景に焦点を当て、問題点を指摘したい。

1. 科目設置の意義とその目的

大学生の学力低下に直面し、大学での「学び方」が問題とされて久しい。勉強の仕方などというものは、実際に勉強を進めながら試行錯誤による格闘の末、見よう見まねで独自の方法を漸次確立して行くのが本来である。そしてそれこそが真の力と言えるものでもあろう。手取り足取り、おんぶにだっこで教え込み、「優れた人材」が育成できるとも到底思われない。ところが、そうも言うてはいられない、つまり勉強すべき内容ばかりではなく、勉強の仕方から教えなければならない状況にあるのが、昨今の大学である。

本学でも、現状に手をこまねいているわけにも行かず、「論文の読み方・書き方」を科目として新設し、学生に「仕方」を伝える態勢を整えることとなった。

この科目は、1年次は週2コマ、2年次は週1コマで、非常勤教員4名に担当してもらっている。年度頭には、専任教員担当者3名、合わせて7名で打ち合わせ会議を開いたほか、ウェブ上の掲示板（非公開）を用いて連絡を密に取り合いながら授業を進めた。夏には合宿を持ち、問題点の洗い出しをした。この試みは現在も継続中である。

さて、大学における学習は、高校までのそれとは全く異なる。高校までは、どうしてもいわゆる「ペーパーテスト」によって学習が規定される側面が強い。そのため授業は、あらかじめ正解が一つに決まっており、教員の期待通りにその正解を発見、申告させる方式となりがちだ。

しかし大学での学習は、学生一人一人が、自らの問題意識にしたがって思考を主体的・能動的に展開するものでなければならない。したがって教員も、そういった目的意識から、その具体的な実践の一環として、単に記憶の正確さや量を試す筆記試験ではなく、論述やレポート提出を通してそれを行おうとする。

ところが学生は、新生をその典型として、レポートも論文も書いたことがない者がほとんどである。やったことのないことは、うまくやれなくて当然だ。そのうえ、見たこともないものを、なぜやらなければならないのかの理由も、すぐには理解できないであろう。それが「何のためか」すら、書かされる学生には分からないだろう。触れたことのないものに対する価値判断や審美眼は、初心者であればあるほど持ち得ない。

この「論文の読み方・書き方」の責任者となったとき、私が考えたのは実は学生のことだけではない。この問題を自らの切実な問題として捉え直した。すなわち、自分自身が思考を深化させるために、自分自身が高度な議論を展開するために、そして、何よりも自分自身が価値ある優れた論文を書くために、ということである。もし、真に有効な「論文の読み方・書き方」なるものが本当に存在するのなら、私が教えてもらいたいくらいである。そしてそれを自ら実践したいというのが現在も偽らざる心境である。

2. 学生に求めるべきもの

とはいうものの、私自身が書く論文と、学生に求めるべきものとは明らかに質が違う。どうしても論文を書かなければならないかの答えとして、「研究というのはそれが進むことによって人類が進歩する、といったものである。おまえの研究が遅れることはそれだけ人類の進歩が遅れることだ！」と西澤潤一先生は述べたという¹。これは我々大学教員が、一学者研究者として目指すべきものでは確かにあろう。しかし、学生に強いるべきものではない。ほとんどの学生は研究者など目指しはしないからである。

(1) まず目指すべきは「レポート」が書けること

レポートを一度も書いたことのない学生に、いきなりレポートを書かせると何が起るか。その典型は、たまたま見つけたウェブサイトからのコピー&ペースト、いわゆる丸写しである。そこには主体的思考の入り込む余地はない。

我々は学生に「勉強」をさせなければならない。

その時いくら一生懸命学んだとしても、使われない能力は退化していくのなら、学生に求めるべきものは社会に出て要求される能力という観点から逆算するしかない。したがって、授業科目名は確かに「論文の読み方・書き方」ではあるが、我々が目指すべきところは、まず学生にきちんとしたレポート（「報告書」）を書けるようにすることである。小説や随筆も書けるに越したことはなか

ろうが、「全ての文章を書けるようにする」などという大それた目標は決して掲げない。

学生は、漏れや偏り無く丁寧に調べ、きちんと分かりやすくまとめられればそれで良い。そこには、実はオリジナリティー（独創性）やクリエイティビティー（創造性）などは不要である。まず、オリジナリティーやクリエイティビティーを第一義とする呪縛から学生を解き放たなければならない。これには教員側の意識改革も必要であろう。

（２）「意見」を発言させよう

レポートや論文を書くのに必要なのは自分の意見である。ところが学生のほとんどは「意見」の何たるかを全く理解していない。「感想」と「意見」の区別すらつかないのが現状である。

私の感覚からすると、事実を知れば自然と何か意見を言いたくってしまうものなのだが、学生はそうではないようだ。これは何かを自発的に「発言する」ことが、高校までの教育に組み込まれていないからでもあろう。高校までにあるのは、質問に対する答え、それも正解があらかじめ決まっている問題に対するものがほとんどだからである。

だから、文章を書かせる際に与える題材は、即座に何かを言いたくなるようなものを注意深く選ばなければならない。また受け身の姿勢から脱却させるために、自分で研究テーマを探させたり選ばせたりする必要もある。学生を化学物質に見立て、何らかの触媒を加え触発し、化学反応の増幅を目論むわけである。

３．授業運営上のテクニック

我々のすべきことは「書けない」を「書ける」に、それができないまでも、少なくとも「書けよう」にはすることだ。そのための障壁は、実は学生の日常生活にある。何かを言うのをとりあえず一切やめさせ、さして言いたくもないことは全て封印させ、本当に言いたいことだけを言うように仕向けなくてはならない。学生たちは、無自覚かつあまりに不用意に言葉を使いすぎるのだ。ペラペラとよどみなく流れる会話には、深い思考の入り込む余地はない。

これは、指導上の問題とも深い関わりを持つ。ノウハウやテクニックをいくら教え込もうとしたところで、「論文」や「レポート」を書く学生本人の内奥に「書きたい」という切実さや必要性がなければ、何かを書く（言う）ことなど、どだい無理な話だからである。人はどうしても良いと思っていることに真剣になることはない。そしていい加減に書かれたものは、無論いい加減なものにしかならない。

学生たちは高校までに、勉強をずっとやらされて来ている。自ら取り組むという主体性・自主性がそもそも極めて弱い。かといってここで「精神論」ばかりを振り回しても効果は期待できそうにない。

現状では、効果を確実に得るためには、学生に功利的に訴える〔成績 就職 出世といった構図

の提示]のが最も効果的なようである。すなわち、「丸写しをしてはいけないよ」と理屈や精神論で伝えるより、「丸写しすると落とすよ」あるいは「こう書くと良い点をあげるよ」「良いところに就職できるよ」と現実面を突きつけた方が良いようだ。

たとえば、理屈で説明しようとするのをやめ、次のような評価基準をあらかじめ提示してしまう。

「評価基準」例

【形式面】

- ・ 一目見て分かる「体裁」は整っているか 講義名、表題(テーマ)、氏名、日付など表紙を見て「何のレポートか」が即座に分からなかったら、その時点で零点。
- ・ 正当な「手続き」は踏んでいるか 引用・要約、注、参考文献など切り貼り、寄せ集めなど、他人のものの写し(盗作・剽窃)は犯罪。

【内容面】

- ・ 偏りや漏れなく充分調べつくしてあるか。手を抜いたところはないか。
- ・ 明確な事実、他人の意見・見解(これも「事実」として扱う)を確実に踏まえ、分かりやすく上手にまとめられているか。
- ・ 真に自分の頭で考え、その結果として下された自らの判断を含むか。そして質問や反論にも十分に耐え得るか。

すなわち、背景となる知識を与えたり、基本となる概念を教え込もうとしたりすることに心血を注ぐより、むしろどしどし具体的に作業させる方が、成果としては期待できるようである。

しかし、功利にかられての行為は真の理解に基づくものではないため、これはその場での効果はそれなりに得られるものの、事態の根本的解決には至らない。

4. 根本的問題点

(1) 階梯化、マニュアル化の困難さ

我々の目指すところは、レポートや論文を「書く」という行為のシステム化である。しかし結論から言えば、それは極めて困難である。その「困難さ」を明確化しながら、この問題に取り組んで行かねばならない。

先の論考で、書く以前には書きたい内容が確定していない以上、文章作成の訓練においては段階を踏んで少しずつ複雑な書き方に変えていくといったことは不可能であると述べた²。

また、まず言いたい内容があって初めて形式が選ばれるのであって、形式を与えておいて内容を

作らせようとするのは行き方が逆であることも述べた³。

ここではさらに他の理由を指摘しておく。

たとえば寺田寅彦の文章は、見事に論文のアウトラインに沿ったものとなっている⁴。しかし、寺田自身がアウトラインをきちんと作ってから、これらの文章を書いたという証拠はどこにもない。

文章の書き進め方には、ひとそれぞれに個性、あるいはスタイルといったものがあるようで、映画評論家として著名な佐藤忠男氏は「木下恵介監督は、クライマックスとラスト・シーンを最初にきめておいて書きはじめるそうである。いっぽう黒澤明監督は、ファースト・シーンからいきなり書きはじめ、ラスト・シーンはラストになってみなければどうなるかわからないそうである。」と述べ、「その種の本[論文の書き方の類のこと]ではたいてい、よい論文は、導入部（あるいは問題提起部）と、展開部（あるいは論証部）と、結論というふうに、全体の構成がきちんとできていなければいけない、といったことが書かれている。（中略）ところが私は、そんなことを意識して論文を書いたことはほとんどない。」「私にとって、論文とは、自分で考えたひとつの主張にたいして、別のもうひとつの立場、あるいはもうふたつか三つの立場から比較検討を加えてゆくというつもりで書かれるものである。（中略）最初からある主張がはっきり出てくるということは少なく、最初はむしろ、ばくせんとした疑問が提出されるだけであることが多い。あるいは、あるひとつの感動や感銘、つまり内面的な経験が書かれるだけであることが多い。そしてつぎに、その意味を求めて、さまざまな立場から検討を加えてみるのである。」⁵と述べている。

この佐藤氏の発言は、私の内省とも一致するもので、私自身、文章を書くときにアウトラインを作ったことは一度もない（作るのはメモ断片）。「こんなことを言おう」というものは、もちろん漠然とした形であらかじめあるわけだが、「書く」という行為自体が「考える」ことであるので、書きながら徐々に明確になって行く、というのが実感に近い。

教える際には、どうしても「書く」手順や段取りを明確に示さなければならない。しかし、「文章はこう書く」と書き進め方を固定的に決めつけることは、思考の自由度を損ねることにもなりかねない危険性をはらむ。教える際、特に初心者の場合には、ある一定の手順でやるように指導せざるをえないが、こうやって書く、と教えることは、こうやらなければならないと堅く決めつけることではないことを、深く肝に銘じておかねばならない。

ここで、私に即座に想起されるのは南方熊楠の「腹稿」⁶である。あの「腹稿」のようなものこそが、書き始める以前に用意されるものであろう。

また木村泉氏の次のような発言も注目される。「文章は、とにかく一度書いてしまわないと話がはじまらない。」⁷「書きものは、何はともあれ書きおろしてしまわなければ駄目なのだ。」⁸

したがってメモは必要でも、アウトラインなどはいらぬというのが本当のところである⁹。

木村氏は、「とにかく書いてみること」の重要性を指摘するのに、ジェラルド・M・ワインバーグの便箋に書かれている First write, then think.【まず書こう。考えるのはそれからだ。】を引いて

いる¹⁰。私も同感である。そこで、書けるようになりたかったら、とにかくどしどし書くようにと学生には勧めるのだが、どうもそれだけではうまく行かないようだ。

(2) さらに根本的な問題 ディベートが成り立たない社会的背景

究極の問題として、どうして「意見」が出ないのか、「意見」を出せないのかを、考えなければならない。意見とは、問いに対する答えである。意見がうまく出ないということは、問いを立てることがそもそもうまくできないということである。したがって、意見を述べるには問いかけて何度も何度も繰り返し、考えを深めて行かねばならない。

しかし、「考え」たことのない人間に、「考え」ろと言っても意味をなさないであろう。何をどうすることが、皆目見当もつかないだろう。「感覚・感情」「事実(また、その解説・説明)」「意見・主張」の違いなども、自分の「意見」を持ったことのない(当然ながら公に発言したことのない)人間には、どうしてこれらの区別が重要なのかさえ分からないだろう。

発言するには「覚悟」が必要である。何をどう考えようと自由勝手だが、公に発言するには、そう考える根拠をきちんと示さなければならない。また何かを「発言する」には必ず「責任」が伴う。質問にはすべて答える説明責任が生じるし、反論にもきちんと受けて立たなければならない。反論ができ、またその反論に再反論できる能力は、極めて重要である。

香西秀信氏は、自身が教室で用いている、あえて反論するという方法について「『生徒が実際にはそれに対して賛成であるか反対であるかにかかわらず、反論を考えさせ、書かせてみる』というくだりには、反発を感じる人がいるかもしれない。自分が反対であると思えば反論するのは当然であるが、最初から反論することに決めているのはおかしいではないかというわけである。」¹¹と述懐している。学生ばかりでなく、ほとんどの教員も同様に、「反論する」ことの重要性とその高い価値を、正確に認識しているとは言い難いのが現状である。

また、野矢茂樹氏は「『批判』¹²は、あくまでも論証部に対する否定を意味するものであり、その結論に対する否定までは意味しない。それゆえ、同じ主張を信じている者が、相手の主張を否定することなく、それに対する論証に対してのみ批判することが可能となる。このような批判の精神は、しばしばわれわれに欠けているものであるから、とくに強調しておかねばならないだろう。」¹³と述べている。しかし私は「しばしば」どころではなく「まったく」欠けているように思う。少しでも何か言おうものなら、たとえそれがささやかな疑義であってさえ、即座に「文句でもあるのか」と言われかねない場面が日常には多い。同時に「まあ、そうかたいことは言わずに適当なところで手を打ちましょうよ」といった雰囲気、日本中のいたる所に蔓延している。

日本にはとことん話し合って決着しようとする風土も文化もない。すなわち、学生を取り巻く文化・風土が、意見を述べることを重要視するものとなっていないのである。価値意識が生まれえないものに対して、学生が努力できないのは至極当然のことである。

だから、問題の根本は、実は高校までの教育にあるのではない。以上述べたように、日本の社会

が「自ら考え発言する社会」にはなっていないことである。

多くの日本人が自分で考えたつもりでいて、その実、他人の意見に流されている。他人の振る舞いに極めて敏感であるのが、日本の文化である。その性向が「学歴社会」や「受験戦争」を生んだとも言えるだろう。

本学の学園祭などでディベートの審査員をしても強く感じることは、学生は「質問（尋問）」と「反論（反駁）」が極めて下手だということだ。一方的に自分勝手なことを言うことならうまくできても、相手の話は全くうまく聞けないのである。すなわち、議論を「対話」として成立させることができない。

この問題の解決の糸口は、やはり学生の日常生活にある。幼少期からのごく普通の生活において、テレビを見、新聞や雑誌を読むなどした際その折々に触れて、家族で論評し合えば良いのである。すなわち、家庭に、そして日常に、本来あるべき「対話」が欠如している。

さて、この考える力が弱いことは、各方面に関係を生じさせつつさまざまな形をとって現れる。その一つが、質問ができないということである¹⁴。質問をする能力もまた、反論する能力以前の能力として極めて重要なものである。

すなわち構図はこうだ。意見（独自の考え、判断、見解など）が出ないということは、問題意識や問いかけがないということだ。したがって質問もできないことになる。そして質問ができないということは、現実の世界に対する認識が低いということである。我々が生きるまさにこの世界に対する認識が薄弱なのである。

我々が目指す地点は、学生が「自ら考え」そして「発言する」ようになることである。それも文化も風土も土壌も下地（高校までの教育）も、何も無いところにおいて遂行しなければならない。さて、何をどうすれば良いか。これが我々の出発点である。

（3）その他の問題 都市化、核家族化、少子高齢化と同時に進行した「儀式（性）の消失」

戦後、華族と平民といった階級は消失し、日本社会は「一億総中流社会」を現出した。しかし同時に、そのことが文化を破壊した面も見逃せないように思う。

そのことと呼応するように、一般の生活からもフォーマルとインフォーマルの垣根が消失していった。葬祭などの儀式・式典が減り、それらに参加する機会が消失することで、フォーマルな場での適切な言動（言葉遣いと立ち居振る舞い）というものが、どんなものか分からなくなってしまいつつある。また若者は堅苦しい雰囲気嫌い、破壊しようとする性向も持つ。昨今の「荒れる成人式」はその顕著な現れであろう。

使う場面がなくなれば、能力が衰えるのは当然のことだ。現代人が、正式公的な発言（敬語を含む）ができず、正式公的な文書（手紙を含む）が書けなくなるのは、時代の流れとして当然のことだと考えられる。

この問題に対して、清水義範氏の以下の発言は注目に値する。

「私がここで言いたがっていることは、学校教育に何もかも求めるのはやめましょう、ということだ。近頃の子供がどんどん悪くなっていくのは学校教育が間違っているからだ、なんてことを言う人が多いのだが、学校はそこまでのことを分担している機関ではないと思う。

だから、学校の先生にパーフェクトを求めるのも無茶である。勉強もうまく教えてくれて、子供の悩みは解決してくれて、西にいじめがあれば行ってやめさせ、東に学級崩壊があればよくないことだと諭し、なるべく教え子をいい上級学校に入れ、愛される優秀な日本人を育成する、サウフモノで先生はあってもらわなきゃ困る、なんて求めるのは酷である。」¹⁵

このように、清水氏は全ての問題の責任を学校教育に求めることを批判する。「社会が次世代を育てている」、すなわち、現代の子供が悪くなっているのは大人が悪いからだ、とする考えから、子どもを、ひいては日本の未来を少しでも良いものにしたいのなら、大人が行儀を良くしなければいけないと説く。書名の「行儀よくしろ。」は、現代日本のすべての大人に向けられたメッセージなのである。

「(工業デザイナーの)川崎(和男)さんは居並ぶ先生方にこういうことを言った。

『仕事ができる会社というのは、オフィスが整然としています。社員たちが自分をちゃんと管理できるんです。しかし、小・中学校の職員室はむちゃくちゃです。机の上があんなに乱雑な人間に、どうして教育なんかできるでしょう。まず机の上を整理して下さい。』

『それから、学校へ来るとジャージの上下という姿になる先生たち、それをやめて下さい。どうしてきちんとした服装でいられないのですか。あれでは、休日に家でゴロゴロしているお父さんと同じです。子供たちに尊敬できるはずがないではないですか』

放送ではそれだけしかきけなかったが、よくぞ言ってくれたと私は感心した。」¹⁶

「いくら口をすっぱくして言っても、うちの子はほとんど本を読みません。本を読ませるようになるにはどうしたらいいんでしょう。(中略)

その質問を受けたら、ちょっと意地悪なようになってしまいが、そのお母さんにこう問い直すしかない。

『お母さんは本を読んでいますか。最近、何を読みましたか。家に、どんな本がありますか。本棚はありますか。図書館へ行きますか』(中略)

結婚して以来その女性が読んだ本は、家庭医学の本と、腹いっぱい食べて痩せる、という内容の本だけで、家には本棚がなく、冊子と呼べるものであるのは、新聞代を払った時にもらう家庭便利帖だけ、という環境の中で、どうして子供が本を読むであろうか。

周りの大人が、子供を教育しているに決まっているじゃないですか、ということを私は言っている。」¹⁷

大人が行儀をよくし、文化の崩れをきちんと修復していくことが、今日本の教育にいちばん大切なことである、というのが清水氏の主張である。いわば社会全体を「学校」に見立て、すべての大

人の振る舞いが「見えないカリキュラム（hidden curriculums）」となって、続く世代の教育を行っているというのである。

清水氏の主張は、日本社会の現状に対する分析としてまことに当を得たものであろう。しかし、行儀よくすべき機会や場そのものが消失してしまった現代の日本社会においては、何らかの別の対策を考え出さなければならないのではないかと。さらに、そのように社会を変えるというのは即効性が期待できないばかりか、その方法すらよく分からない。現実に行儀よくできる場所は、どうしても学校に戻って来ざるを得ないのではないだろうか。

授業中の学生の私語、遅刻や欠席など、今日の大学が抱える問題は全てが大衆化によって引き起こされた大学の価値の下落がもたらしたものだ。学生ひいては社会が、大学や学問また勉強を、大切なもの価値あるものだと切実に感じているならば、そのような態度となって現れるはずがない。

問題は文章の読み書きだけではとどまらない。教場での行儀（礼儀・マナー）をも改善する方策を模索していく責務が、我々大学人にはある。

（たかまつ まさき・本学経済学部助教授）

注

- ¹ 小浜裕久・木村福成（1998）『増補版 経済論文の作法』日本評論社 p.42.
- ² 高松正毅（2003）『『文章表現技術』の理論確立に向けて』『高崎経済大学論集』第45巻第4号
- ³ 高松正毅（2004）『『起承転結』小考』『高崎経済大学論集』第46巻第4号
- ⁴ 森岡健二（1995）『新版文章構成法』東海大学出版会 による。事例は、随筆「とんびと油揚」pp.83-90. 「ほととぎすの鳴き声」pp.139-144.
- ⁵ 佐藤忠夫（1980）『論文をどう書くか』講談社 p.104. pp.106-7. pp.107-8.
- ⁶ 南方熊楠（1971）『南方熊楠全集 1』平凡社 口絵等を参照。
- ⁷ 木村泉（1993）『ワープロ作文技術』岩波書店p.9.
- ⁸ 前掲書 注7 p.19.
- ⁹ メモの重要性は、宮部修（2000）『文章をダメにする三つの条件』丸善 なども指摘するところである。
- ¹⁰ 前掲書 注7 p.73.
- ¹¹ 香西秀信（1995）『反論の技術』明治図書出版 p.43.
- ¹² 野矢茂樹氏の「批判」は、香西秀信氏の「論証型反論」に当たる。
- ¹³ 野矢茂樹（1997）『論理トレーニング』産業図書 p.134.
- ¹⁴ 宇佐美寛（1993）『「議論の力」をどう鍛えるか』明治図書出版 pp.44-59.（もと宇佐美寛（1979）「問いの構造 吉田章宏氏に」『現代教育科学』1997年6月号pp.90-5）に駄目な質問の例がある。ちなみに野矢茂樹氏は、分かりにくい表現の意味を問う「意味の問」、根拠と導出の構造に関わる「論証の問」、さらに、全体として何を言いたいのか、またはその場面でどうして特に尋ねるのかの「意図の問」の三つに質問を分けている。前掲注12 p.130. p.179.
- ¹⁵ 清水義範（2003）『行儀よくしろ。』筑摩書房 p.56.
- ¹⁶ 前掲書 注14 pp.57-8.
- ¹⁷ 前掲書 注14 pp.75-6.